2017 年 11 月 27 日　嶋田彩司担当

李 光洙（イ・グァンス）（이광수）

Ⅰ　李光洙の評価をめぐって

1，川村湊「歪んだ鏡―日本のなかの李光洙―」（明治学院創立 150 周年記念国際シンポジウム記録『李光洙とはだれか？』　かんよう出版　2014 年）

李光洙、本名は李寶鏡、創氏改名の時代には、香山光郎【かやまみつろう】という日本名を名乗った。一八八二年に生まれ、一九五〇年（？）に死んだとされている。当時の朝鮮人の多くがそうであったように、生涯に三つ、あるいはその読み方も含めれば、五つ以上の名前を持ったことになるかもしれない（李光洙は、り・こうしゅ、イ・グァンス、李寶鏡は、り・ほうきょう、イ・ポギョン）。さらに、朝鮮では春園（チュンウォン）という雅号が使われる場合が多いから、春園（李光洙）も、別名とすれば、その呼び名はとても複雑になる。

その呼び方に準じて、彼の文学者としての性格や人となりも、かなり異なっていると感じられる。本名の李寶鏡で呼ぶ人は幼い頃からの知人、友人であろうし、李光洙【り・こうしゅ】と呼ぶのはもっぱら日本人、イ・グァンスであれば、韓国人の研究者や読者、香山光郎は、彼のいわゆる「親日作家」の時代だけに通用する特殊な呼び方ということになるだろう。

李光洙は、朝鮮近代文学の〝父〟である。こうした評価は、おそらく今後とも大きく変わることはないだろう。彼は、朝鮮文学史上、最初の近代的な長編小説『無情』を書いた。そして、その後も、多くの長編小説、短編小説、評論やらエッセイを書いて、朝鮮文学の創始者、開拓者、大御所として存在していたのである。「親日派作家・香山光郎」として、その晩節を汚さなければ、だが。

2，『白金通信』のシンポジウム報告文より（嶋田彩司）

李光洙はいまから百年以上も前に明治学院で学んだ留学生、つまり同窓の先輩です。彼は「韓国の漱石」とも賞賛される文学者で、韓国の若い人ならだれもが国語の教科書で彼の作品（の一部）を読んでいるといってよいほどの有名な作家です。

が、一方で、李光洙は不名誉な著名人でもあります。彼は、日本の植民地支配下にある朝鮮半島の独立を目指して活動した青年期から一転、後年には創氏改名して日本人名を名乗り、日本の天皇への恭順を率先して示すなど、いわゆる「親日派」として今ではきびしく批判されています。

偉大にして醜悪な先輩、李光洙。

2013 年 11 月 9 日、白金校舎 10 階大会議場で開催されたシンポジウムでも、李光洙の「光と影」をどのように理解するかに焦点があてられました。その具体的な内容は、近刊『李光洙（イ・グァンス）とはだれか』（かんよう出版）をご覧いただくとして、ここでは、ただひとつのことだけをみなさんに伝えたいと思います。

それは、李光洙が映し出す「近代」についてです。たしかに李光洙はその晩節を汚しました。植民地支配に加担する彼の言説が、その真意がどこにあったかはさておいて、結果として朝鮮半島の多くの人々を苦しめたという事実を否定することはできません。それが朝鮮半島の「近代」に消しがたい傷跡を残すことになりました。

しかし、同時に、李光洙を生み出した強権支配の背後に、善良な市民であった私たちの祖父母や父母がいたことを忘れることもできません。八紘一宇のスローガンのもと、多くの日本人が朝鮮半島の植民地支配を支持しました。それが日本の「近代」です。

そんな日本の「近代」と朝鮮半島の「近代」のあいだに、李光洙は立っています。彼の母校である明治学院ですらほとんど忘れていたような李光洙を立ち上がらせたのが、このシンポジウムだったといえるでしょう。

◆李光洙…1892～1950？ 朝鮮半島出身の文学者、思想家。明治学院、早稲田大学に留学し、2・8独立宣言（1919）の起草などに関わる。小説『無情』（1917）によって朝鮮近代文学の祖とされ、「韓国の漱石」などと評される。一方で、植民地支配時代からアジア太平洋戦争時にかけて日本に協力し、創氏改名して香山光郎と名乗るなどした「親日」行為が、戦後につよく批判されてもいる。現在、『無情』は韓国の国語教科書に多数掲載されるが、李光洙自身は日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法にもとづき、親日反民族行為者の１人に認定されている（2009）。

◆アジア太平洋戦争が終結し、日本の植民地支配に協力した韓国人が厳しい査問を受けることとなった反民族行為処罰法の調査委員会（1949）において、李光洙は「私は民族のために親日をしました」と述べたという。「私の歩んだ道は正道ではありませんが、そうした道を通る民族への奉仕もあるということをわかってください」。李光洙はそうも述べたという。

韓国の評論家キム・ヒョンは李光洙について「触れるほどに血の噴きだす民族の傷口」と表現した（1977）。不用意に李光洙に触れると返り血を浴びるというほどの意味であろうか。生き残った韓国人は皆、何ほどかの意味で李光洙ではないかという誠実な自省の言葉だと受け取ることができる。

では、海をはさんで日本から見る李光洙はどのような存在か。私たちは彼をどのように評し得るか、受講者に問いたい。

左：1919 年頃の李光洙

右：1945 年の朝鮮半島

下：明治学院記念館前集合写真。
1909 年頃。李光洙は最後列左端
（明治学院歴史資料館所蔵）

◆李光洙　略年譜　（年齢は数え年。□は歴史的事項。丸数字は補足資料参照）

1892 年（1 歳）	2 月に平安北道・定州郡の僻村で生まれる。家系はもと裕福なるも凋落の途にあった
1894 年（3 歳）	日清戦争（～1895）
1897 年（6 歳）	李氏朝鮮の国号が 大韓帝国 になる（～1910）
1902 年（11 歳）	8 月、父母がコレラで急逝。親戚の家を転々として半ば浮浪児の生活を送る
1903 年（12 歳）	東学教徒の伝令として働く　→①
1904 年（13 歳）	2 月、日露戦争 が始まる　　9 月、上京
1905 年（14 歳）	東学の留学生として来日　→②
1906 年（15 歳）	4 月、神田三崎町の大成中学校に入学するが、夏に東学の内紛により学費がとぎれて帰国
1907 年（16 歳）	皇室留学生として再来日。9 月、**明治学院中学** 3 年に編入学

1909 年（18 歳）	12 月、『白金学報』に「愛か」が掲載される
1910 年（19 歳）	創作多数。『新韓自由鍾』第 3 号発行。中学を卒業、帰国して五山学校（平安道にあった民族主義教育の学校）に赴任。日韓併合　→③
1915 年（24 歳）	9 月来日、早稲田大学予科入学、翌年 4 月文学部哲学科入学（内地留学）　→④
1917 年（26 歳）	結核発病。1 月**『無情』**を『毎日申報』に発表。好評を博す　→⑤
1918 年（27 歳）	10 月、許英粛と北京に駆け落ち　11 月第一次大戦 終結
1919 年（28 歳）	東京で **2・8 独立宣言起草**　→⑥　三・一独立運動。上海で臨時政府樹立に参加
1921 年（30 歳）	4 月、帰国して逮捕されるが不起訴。許英粛と再婚
1922 年（31 歳）	2 月、修養同盟会をおこす　5 月「民族改造論」発表　→⑦
1923 年（32 歳）	5 月東亜日報入社　9 月関東大震災
1926 年（35 歳）	1 月、修養同友会となる。6 月に入院。11 月、東亜日報の編集長に就任
1929 年（38 歳）	5 月、腎臓結核で大手術。7 月、修養同友会を同友会と改称
1931 年（40 歳）	9 月、満州事変
1932 年（41 歳）	満州建国 。4 月に安昌浩が逮捕される。9 月、東京に滞在して日本の文学者たちと交流する
1933 年（42 歳）	8 月に東亜日報を辞任して朝鮮日報副社長に就任
1934 年（43 歳）	息子鳳根（ボングン）が敗血症で死去する。連載を中止し、金剛山長安寺に入る。→⑧
1937 年（46 歳）	6 月、同友会事件。　→⑨　7 月、日中戦争 。12 月、保釈
1938 年（47 歳）	3 月、安昌浩死亡。8 月に裁判が始まる。11 月 3 日、思想転向会議を招集、起訴会員ら裁判所に**思想転向申述書**を提出し朝鮮神宮を参拝する
1940 年（49 歳）	2 月、香山光郎と**創氏改名**。　→⑩
1941 年（50 歳）	11 月 7 日、同友会事件結審して全員無罪。12 月 8 日、太平洋戦争　→⑪
1942 年（51 歳）	11 月、東京で第 1 回大東亜文学者大会に参加
1943 年（52 歳）	11 月、**半島出身学生に兵役志願を勧める**ために東京へ　→⑫
1944 年（53 歳）	この頃、1 年で 7 編の日本語小説を執筆。11 月、南京で第 3 回大東亜文学者大会　→⑬
1945 年（54 歳）	8 月 15 日、日本敗戦 を隠遁先で迎える
1948 年（57 歳）	『我が告白』　→⑭
1949 年（58 歳）	反民族行為処罰法により収監、病により保釈、不起訴　→⑮
1950 年（59 歳）	6 月に朝鮮戦争 勃発。平壌に強制移送されたあとの消息は不明

波田野節子著『李光洙』（中公新書）等に拠る

1991 年、米国在住の子息に北朝鮮当局より連絡があり、訪朝した際に、1950 年 10 月 25 日に平安北道で労働中に肺結核で死亡と説明されたという。しかし、死因については凍傷とする説があり、また、1952 年に北京で死去したとの説もあって、事実は定かではない。

◆　補足資料

①東学は、1860 年に創始された朝鮮半島の土着的宗教思想。西学（天主教）に対して東学を名乗るように、西洋の侵略に抗する民族主義的傾向をつよくもっていた。そのため東学は多くの若者を日本に留学させ、西洋列強に負けない精神と知識を身につけさせようとした。李光洙は『私の告白』（1948 年）において、

私が東学に入道したのは 12 歳の冬だったが、私を東学に入れた人間が承履達という学のある士人の頭目だったため東学の教理を詳しく学び、また朴賛明頭目の書記として、東京とソウルに来るあらゆる文書を書き写して各地へ回す仕事や口で伝える仕事をしていたため、東学の理論的内容と道人〔天道教信者〕の実践する日常生活を見る機会も多かった。世の中のための仕事だけが人の職分だという考えが好きだった。

と書いている。また、『彼の自叙伝』（1936 年）のなかでは、

私には…野心があった。これから朝鮮で最高の、世界に名だたる人間になるのだという野心が、胸のなかで煮えたぎっていた

と書くが、彼が東学から与えられたものは衣食住だけではなく、宗教的な素養と未来への希望でもあった。

②朝鮮半島から日本への留学生は三期にわかれるという。第一期は、1881 年の紳士遊覧団に随行して残留し、慶應義塾に学んだ 2 名などが知られている。第二期には開化派政権のもと二百名を超える留学生が派遣された。そして第三期には特派留学生のほか、多数の私費留学生が来日しており、波田野節子（『韓国近代作家たちの日本留学』）によれば日本留学が旧来の科挙の代替として機能したかのごとくであったという。資料によれば、日本が日露戦争で勝利するとアジアからの留学生は飛躍的に増え、李光洙が来日した 1905 年頃には、東京だけで 400 名以上の韓国人留学生がいたとされ、中国人にいたっては 1 万人にのぼるとされている。まさに当時の青年にとって日本への留学は立身出世の糸口であった。

しかし一方で、日露戦争の勝利は、日本人に一等国意識を与え、アジア周辺国への優越感を植え付けるきっかけにもなっていた。魯迅が日本留学時代（1902～09）に、仙台医専での試験合格をカンニングによるものと疑われたというエピソード（「藤野先生」）もアジア蔑視の一端のあらわれにほかならない。李光洙が来日した 1905 年は、第二次日韓協約が締結され、大韓帝国は日本の保護国となった年である。外交権は日本政府が管理し、漢城（後の京城、現ソウル）には統監府がおかれた（初代統監は伊藤博文）。

このような状況下、留学生には留学先である日本に対して祖国の迫害者として敵愾心を抱く傾向があったとされている。帝国主義下の日本が併合前とはいえ実質的な植民地とした朝鮮半島でおこなった歴史的事実を思えば、その心情は当然のものといえなくもないが、そうであればなおさら、祖国を呑み込もうとするまさにその「敵国」へ留学して学ぶ若者たちの心理的ストレスは察するにあまりある。

たとえば、崔南善（詩人、多くの雑誌を創刊した）は日本の書店にある豊富な刊行物を目にして、

その前でうなだれ、ため息をつき、つづいて拳を握りしめ、握りしめながら、「いつかは機会があるはずだ」という望みをいだいて自分を慰めた。

と書いている（前掲波田野氏著作より引用）。

崔南善もまた李光洙の友人のひとりであった。1908 年に崔南善が創刊した月刊誌『少年』に李光洙は初期の小説・論説を発表している。おそらくは崔南善が示したような支配国日本に対する反発と母国への愛着を李光洙も共有していたはずである。そして、そのような感情をひとまとまりの論理的なことばとして表明するための思想的、文学的契機を彼らはほかならぬ「敵地」日本からうけとり、日本語を通して（つまり書店にずらりと並んだ本の繙読によって）鍛錬したのである。

③1910 年 8 月 29 日、大韓帝国皇帝は統治権を大日本帝国天皇に譲渡し、日本は韓国を併合する。

私は旅行を中止して、駅から学校に向かった。しばらく歩いてからやっと、「ついに国が滅びたのだ」と考えることができた。私は…一人で泣いた。（略）力！そうだ力だ！日本は力で我が国を奪った。奪われた国を取り戻すのも力だ！大韓の国を押さえつける日本の力は、それよりも大きな力をもってしか押し返すことができない。（『我が告白』）

④この頃、李光洙はふたつの論説を雑誌（『洪水以後』3，4 月号）に投稿している。前者（「朝鮮人教育に対する要望」）では、朝鮮人が日本人と同じく「天皇の赤子」であるなら、内地と平等な教育の提供を求める権利があるとしながら、そうなれば朝鮮人は「衷心から感謝する」だろうし、また参政権も与えて「完全なる日本臣民の列に加えて貰いたい」などと記している。一方、次月号の後者（「朝鮮人の眼に映りたる日本人の欠点」: 匿名投稿）では、日本人は「朝鮮人もしくは支那人に対し傲慢極まりな」いのに、「白人種特に英国人に対する態度の卑屈さはまことに笑止に堪え」られないと痛烈に日本人を罵倒している。前者の論法（日本の主張を逆手にとるもの）は李光洙の常套手段で、のちに李光洙の親日的卑屈さのあらわれと非難されることになる。これについて、李光洙は解放（日本の敗戦）後に書いた『我が告白』のなかで、次のように書いている。

> たとえば、「われわれ朝鮮人の教育機関を作ってくれ」と言いたい場合、言論人や公職者は「同じ天皇の赤子ではないか、なぜ教育に差別があるのだ」と言わなければ、当時は通じなかった。官公職の朝鮮の制限や差別打破をさけぶための公式は、「…内鮮一体ではないか、明治大帝の御心ではないか、なぜ内鮮差別をするのだ！」というものだった。

このような李光洙の態度をどのように評価するか？

韓国においては、金允植（キムユンシュク）が『李光洙とその時代』（1983）において、李光洙の卑屈な親日的態度を徹底的に批判糾弾したのに対し、金源模（キムウォンモ）は『山の上の雲』（2009）において、李光洙の親日を偽装であると主張するなど、その評価はかならずしも一定していない。

⑤『毎日申報』は当時朝鮮で唯一の朝鮮語メディアであり、李光洙はこれに春園（チュヌォン）の号で多数の論説を書いた。そこには、「大邱にて」と題する一文において、朝鮮の青年の不満を和らげるために「高尚な仕事」は日本人に任せ、下級職に朝鮮人を採用してほしいと主張しているものなどのように、今日では批判を受けているものが含まれる。また、「朝鮮家庭の改革」「早婚の悪習」など、朝鮮人の生活改善に関わる言説も多い。
これらの論説文は当時概ね好評を得た。そこで編集部は李光洙に小説の執筆を依頼する。これに応えて発表されたのが、朝鮮近代文学史上初の本格的小説とされる『無情』である。同作は 1917 年元旦から 6 月 14 日まで、126 回にわたって連載され、絶大な支持を得る。李光洙はこの作品について次のように書いている。

> 当時は韓国が日本に併合されて間もないころで、言論出版の自由は露ほども許されていませんでした。それで朝鮮人は…固く口をつぐみ、…死のような沈黙は永遠に、永遠につづくのかと思われました。かかる時において、沸きかえる脳中の不平と、あからさまには口に出して言えぬ民族的のある憧憬とを、文学的形式を借りて表現しようとするのは、むしろ当然でありました。(『朝鮮思想通信』)

『無情』は、英語教師李亨植（イヒョンシク）と富豪の娘善馨（ソニョン）、恩師の娘英采（ヨンチェ）を中心に話が展開する。そこでは旧来の因習と新時代の生き方が交叉し、背景となる町並みにも新旧の風物が混在している。結末において、それら混沌とした時代のなかから主人公たちが新しい「文明」への旅立ちをめざす場面で作品は終わるが、恋愛の機微をえがいて読者を飽きさせない通俗性と啓蒙的な教訓性がほどよく調和して、広範な層の読者を獲得し得たといえる。李光洙の歴史的評価とは別に、本作が朝鮮半島出身作家による近代的な小説の嚆矢であるという評価は今なお揺るぎない。

⑥1919 年 2 月 8 日、神田小川町の朝鮮基督教青年会館で留学生 300 名が集まり宣言した。三・一（独立）運動の先駆となる（「朝鮮青年独立団」代表 8 名の署名と、宣言文、4 条の決議文からなる）。

> 一、日韓併合は吾族の自由意志に出ざるのみならず、吾族の生存と発展を威脅し、又東洋平和を攪乱する原因たるべしとの理由により、独立を主張す（下略）。

三・一運動は、大韓帝国初代皇帝高宗の葬儀にあわせて、キリスト教、仏教、天道教（東学）の指導者たちが主導した独立運動。当初より非暴力主義的な運動であり、「独立万歳」を叫びながら、多数の市民が参加し、運動は朝鮮半島全域に広まった。日本の朝鮮総督府はこれを鎮圧しようとし、堤岩里事件（教会における住民数十名の射・焼殺事件）などが発生した。

⑦李光洙は朝鮮民族の自立のため、「嘘をつかない」「空論ではなく実行する」「信義を守る」「勇気を持つ」「私より公を重視する」「専門技術を持つ」「経済的に独立する」「衛生と健康に留意する」ことを挙げている。この論説は大衆の民族的自尊心を傷つけ、出版社襲撃事件まで起こった。しかし民族教育を真剣に考える李光洙は、これらを実践するための団体（修養同盟会）の設立許可を、第三代朝鮮総督斉藤実に面会して取り付けている。この修養同盟会は修養同友会から同友会へと名称を変え、次第に独立を目的とする戦闘集団的な組織へと変遷してゆく。

⑧『육장기』（自伝的短編小説）
法華経を主として仏経を読むようになりました。8歳になった息子の残酷な死が、私をして人とは何か？　どうして生まれるのか？死とは何であり、死んだらどうなるのか？という問題を考えさせずにはおけなくしました。なので私は、死んだ息子の鳳根も私を仏道に導き入れるためにやってきたのだと信じています。

⑨1937年6月7日、同友会会員は治安維持法違反の容疑で逮捕される。李光洙は脊椎カリエスにより保釈されるが、取り調べで死亡したり廃人になった者もいる。1938年、李光洙らは起訴されるが、11月3日の明治節にあわせて思想転向を表明する（下記は転向声明「申合」の決議箇所）。

一、吾等は至誠を以て天皇に忠義を致そう
二、吾等は日本国民たる信念と矜持とを以て帝国の理想実現の為め、精神的に並に物質的に全力を尽くそう
三、支那事変は我が日本帝国の国家的理想実現の基礎に関することなるをしかと把握し…あらゆる国策の遂行に最善の努力をなそう

李光洙は1ヶ月後の会議においても、「朝鮮人という固執をすてて日本人になり、日本精神を持つことを決心しました」と公言している。そして、これより李光洙の対日協力がはじまる。具体的には、朝鮮人による皇軍慰問作家団の結成、朝鮮文人協会の結成（李光洙は会長に就任、一ヶ月半後に辞任）などがある。

⑩創氏改名は朝鮮総督府が1939年、制令によって朝鮮に本籍を置く日本臣民（朝鮮人）に氏の創設と改名をさせた（許可した）政策。新聞記事によれば、李光洙は香山の氏を大和三山の天香具山からとったという。なお、創氏改名の強制性については議論がある（実際に改名しなかった著名人も存在する）。

半島文壇の大御所
李光洙さん氏へ名乘り
一家揃つて「香山」姓へ

（余談）2003年5月31日、麻生太郎・自民党政調会長が東大における講演会で「創氏改名は朝鮮人が望んだ」と発言し、韓国政府が謝罪を求める談話を発表、盧武鉉大統領の訪日を直前に控えていたこともあり、麻生は発言を謝罪した。後日、自民党総務会で野中広務が麻生を批判したが、その場にいた奥野誠亮が「麻生君が言うことは100%正しい。朝鮮名のままだと商売がやりにくかった。そういう訴えが多かったので、創氏改名に踏み切った」と述べたという。

京城日報1939年12月20日

⑪『文學界』1941年3月号に掲載された随筆「行者」（小林秀雄の求めで書かれた）において、李光洙は「朝鮮人が日本人になるには――本物の日本人になるには、まず従来の朝鮮的な心を根こそぎ棄ててかからねばなりませぬ」と述べている。当時の李光洙について、親交のあった思想家河上徹太郎は、「我々は或る痛ましい陰を氏の表情に読み取つて暗然とするのだつた」と書いている（『文學界』1943年1月号）。

⑫1943年10月、日本政府は満20歳以上の学生の徴兵猶予を停止した（学徒動員）。一方、朝鮮には徴兵制度がなかったため、省令によって志願兵を募り、結果としてほとんどの学生が志願させられた。しかし、総督府の強権は内地に留学する朝鮮人には及ばず、そのため著名人による日本留学生勧誘団が結成され、11月に来日し、明治大学等で講演会を開いた。李光洙は、

（日本の大学への入学について、日本政府は）従来もさまざまな手段で制限してきたが、それはますます深刻になるだろう。我々の子どもたちが大学…から排斥されたらたいへんなことになる。(『我が告白』)

と後に書いているが、波田野節子の報告によれば、李光洙の講演を京都で聞いた人物の証言として、李光洙は「君たちが犠牲になって功を立ててこそ、わが民族は差別を受けずに生きていける。朝鮮民族のために戦争にいってくれ」と演説し、それを聞いてその人物は「李光洙の親日に民族のための苦しみがあった」と感じたというインタビュー記事が『朝鮮日報』(2014 年 10 月 19 日）に載ったという。また、当時、東京で講演を聞いた金鳳九（キムポング、仏文学者）は、「李光洙の愛国と民族主義思想に露ほども偽善はなかった」としつつも、同時に「春園（李光洙）は、生涯、民族意識を病んでいた」とも書いている（1964)。

⑬評論家金基鎮（キムギジン）は 1974 年に発表した回想録において、李光洙が『京城日報』に「額に針を刺したら日本の血が出るほど日本人になれ」と書いたことについて問いただすと、李光洙は、朝鮮人は日本人よりも優れている、朝鮮人が国政に参加すれば日本を掌握することができる。やがてそうなることを恐れて日本は併合の取りやめを言ってくるだろう。そうすれば自分たちは朝鮮半島を取り戻して独立すると述べた上で、「いまは日本人に朝鮮人を信じ込ませるために」そのようなことを書いているのだと答えたという。

⑭1948 年 8 月 15 日に大韓民国、9 月 9 日に朝鮮民主主義人民共和国が成立する。李光洙は大韓民国を支持し、選んだ。その際、李光洙は自らの立場と使命を「わたしは罪人…祖国はわたしを許し呼んでくれた…死ぬ日まで祖国を讃える歌を書こう。そして、独立国の自由の民として目を閉じよう」と詩にあらわしている。

しかし、人々は李光洙を「許し」てはくれなかった。対日協力への糾弾の声が高まってきたときに、李光洙は『我が告白』を執筆する。それは正直で赤裸々な「罪人」の告白ではあったが、さいごに李光洙は「丙子胡乱」（병자 호란:1636～37 年に清が李氏朝鮮に侵入し、朝鮮を制圧した戦いの朝鮮での呼び名。中国では丙子之役）で捕虜となった女性達の扱い（「弘済院の沐浴」: 王が女性達を弘済院で沐浴させることで、貞操に関する一切の議論を封じたという故事）を引例して、民族の和解のために親日派を許そうと訴えたことが、自己弁護の卑怯な言い訳として、人々のおおきな反発を招いた。

⑮《再掲》アジア太平洋戦争が終結し、日本の植民地支配に協力した韓国人が厳しい査問を受けることとなった反民族行為処罰法の調査委員会 (1949) において、李光洙は「私は民族のために親日をしました」と述べたという。「私の歩んだ道は正道ではありませんが、そうした道を通る民族への奉仕もあるということをわかってください」。李光洙はそうも述べたという。

・・

3, シンポジウムにおける崔起榮（チェ・ギヨン　韓国・西江大学教授、歴史研究家）のコメント（抄出）

李光洙の親日についての理解というか、弁護の立場に立つ研究も少なくない。私は李光洙が自らを指導者と自認していたにもかかわらず、彼の思惟は個人のそれの範囲を大きく越えることはなかったのではないかと考えている。李光洙は、自らを民族に重ね合わせて数多くの思いを巡らしたが、現実の状況と政治体制のなかで直接的な闘争とは距離を置いた彼には、漠然とした表現ではあるが、指導者に要求される「格調」が不足していたのではないかと思う。(中略) 李光洙は敗北主義的であり、彼の自己卑下的な論議と、日本が屈折させて受容した西欧文明についての過大な憧れなどを、個人を越えて民族という共同体の見解として掲げる点や、解放後に様々なかたちであらわれる自己弁明にも、そのような姿が見て取れる。李光洙を非政治的観点から評価するという見方も可能であるといわれるが、高度に政治的な役割を担いつつも、それを彼が正しく自己認識することができなかったのであれば、やはり彼はそれとは異なった次元で評価されなければならないであろう。したがって、彼の親日的姿勢に対する弁明や擁護が、彼自身や一部の研究者によってなされているが、私は、彼が残した何編かの文書のみを判断の材料とするときに、そのような評価には納得することができないのである。

4，崔起榮のコメントに対する李省展（イ・ソンジョン　恵泉女学園大学教授、歴史研究家）の応答（抄出）

崔先生がご指摘なさった、指導者としての資質の問題ですが、(略) 敗北主義的な部分、支配者にこびるというか、アメリカのコンテクストで言うとアンクル・トム的な部分ですね。文学の専攻でない私にも非常に気になる、後味の悪い読後感が長く残りました。しかし、李光洙を擁護する必要はないとは思いますが、李光洙を理解する、彼の弱さを含めて理解することは必要かと思われます。極端にいえば、李光洙の解放後の自己弁明は、金石範先生も言われるように、悪臭のただようような自己弁明かもしれませんが、私のような歴史研究者にとっては、よくぞ悪態を文章として残してくれたと感じる部分が実はあります。それによって、かえって、人間存在の複雑性や、植民地主義が及ぼした深刻性が浮かび上がってくると考えるからです。

5，崔起榮・李省展のやりとりを承けた波田野節子（新潟県立大学、文学研究家）の発言（抄出）

李省展先生の言葉で、私が印象的だったのは「よくぞ文章で残してくれた」とおっしゃったことである。逆にいうと、「我が告白」のような文章を残したことによって李光洙は、後日に厳しい批判にさらされるわけで、あれを残さなければどんなに良かったかと思うこともあるのだが、やはり最後にあの文章を書いてくれたことは僥倖であったと感じている。当時、李光洙と同じような声をあげている人はたくさんいた。そのなかで李光洙が特別に有名で、そして影響力があった。だから彼の言葉が後世に残り、彼は批判される。しかし、それは李光洙にとっては不幸であったかもしれないが、今となっては、多くの人にあの時代を知らせるひとつの窓になったという意味で幸いなことでもあった。私は時代の窓としての李光洙を今後も書きつづけたいと思う。

6，『李光洙とはだれか』（上掲書）における嶋田の総括

・崔起榮は、李光洙が「政治的な役割」の中心部にいたという事実を重視する。そこでは「個人」的な言説は止揚されて民族のものとならなくてはいけないのに、彼にはそれができなかった。むしろ彼個人を全体（民族）に安易に重ねてしまうようなところがあった。「指導者」を自認する者は、ときに自己を捨てることで全体の正義に加担し、逆説的な言い方になるがそうすることによって自己を保つような潔さ（「格調」）が必要なのだと、稿者（嶋田）は崔起榮のことばを受け取った。かんたんにいえば、崔にとって、「高度に政治的な」位置にいた人間を、「非政治的観点」から評価することは無意味であり、あくまでも政治的観点から評価する限り、李光洙は無責任なアマチュアだったといいたいようである。

・李省展は、「親日」を帝国主義による植民地支配の構造のなかで読み解こうとする。そして、その問題の今日的意義についても言及する。もとよりそれが李光洙の免罪を意図するものでないことはたしかであるが、誰もが加害者にも被害者にもなり得ること、そして政治と社会の構造性のなかでは個々の人間があまりにも無力であることを、まずは加害の立場にあった者たちが自省とともに引き受け、受け継ぐ必要のあることを李省展の発言は示唆する。李光洙は朝鮮・韓国の人々にとっては加害者であったが、同時にまた、李光洙は日本の帝国主義の被害者でもあった、とまでいっては李省展の認識から逸脱してしまうかもしれないが、植民地支配の時代の政治や社会、つまりは「近代」を成り立たせていた構造性が、李光洙をも包み込むものであったことはたしかであろう。

7，李光洙『我が告白』（1948 年）

協力しても協力しなくても、結局は協力させられる。何があっても自分たちは協力させられるのだ。それだったら犠牲をたくさん出して最終的に協力させられるよりは、むしろこちらから進んで協力すれば犠牲者は少なくてすむ。協力することによって内部に食い込んで自分たちの力もつけることができる。

ほかの親日派はどうなのかわかないが、私がしようとする親日派は、お金や権勢や名誉が得られる役ではない。私がある日家内に私の決心を打ち明かした時、彼女は私の気が狂ったと泣きながら止めた。私も泣き崩れた。しかし、私の考えにはこれが民族のために生きていると自認していた私として最後にやるべきことだと、家内に言った。

8，李光洙の上記の弁明について、在日の作家金石範は「奴隷のことば」と批判する。（『転向と親日派』）

9，鄭百秀「「日本人」という観念への追求—李光洙の「親日」を再考する」

アジア太平洋戦争期の李光洙の思想を、「朝鮮人」の立場から日本帝国主義者の植民地統治や戦争遂行に＜協力＞をする、という今の時点で一般的に考えられるようなレベルの主張に還元することはできない。大東亜共栄圏の建設、特にその一環としての「内鮮一体」実現への李光洙の対応は、まず「朝鮮人が日本人に生まれ変わる」ということを前提していたのである。厳密にいうと、李光洙の「親日」は、植民地人が日本帝国の立場に好意を持って支持をするという意味の＜親日＞でも、植民地宗主国の支配政策に従属的に参加するという意味においての＜協力＞でもない。それは「朝鮮人の日本人化」という共同体のアイデンティティー変容の論理と実践だったのである。（略） 李光洙の「完全な日本人」への追求は、一言でいうと、支配者、すなわち＜現実の＞日本人の地位そのものを乗り越える模倣である。朝鮮人が日本人より「完全な日本人」になるために修行をする状況の中では、同化を要求してきた＜現実の＞日本人は逆に同化が要求される立場に追い込まれることになって、結果的に日本人による朝鮮人の支配という支配・被支配の関係が否認されてしまうからである。こうした模倣こそ李光洙の「親日」の特徴であったのである。

Ⅱ　李光洙とキリスト教

1，佐藤飛文「朝鮮半島出身留学生からみた日本と明治学院」（明治学院キリスト教研究所 1 日研究会 レジュメ、2012 年）より

李光洙は明治学院に入学して初めて聖書を読み、キリスト教と出会った。彼の代表作である「無情」（略）と「有情」の主人公（略）はともに東京のキリスト教学校での留学を経験したクリスチャンの教師という設定になっている。明治学院でのキリスト教との出会いは、彼の文学作品に大きな影響を与えたと言えるだろう。

2，明治学院とキリスト教（1）

この M 学校はキリスト教長老派系統の学校で（略）私はこの学校に入学して初めて聖書というものを学んだ。見るのも初めてだった。(『彼の自叙伝』)

私は本当に聖者になったように思った。こんなふうに、私の生命のある日まで続けようと決心し、祈った。私に慢心の起こることは大きな病であるが、いま考えても明らかにあの時の私の生活は、神の恩恵をふんだんに受けた生活だった。今日の私の人格に少しでも取るべき点があるとすれば、その基礎は明らかにこの時に生まれたものだった。(「나」)

私が聖書を読み、礼拝堂に通ったのも、私の身体と心を清らかにする糧だった。私は心にある汚れたものを捨て去れば、自然に身体から香気が立ち昇るだろうと信じていた。私は私の顔と手足と身体つきを美しくすることができないのが、悲しかった。(同上)

寒い冬の夜のような時に道を歩いていて、震えながら通り過ぎる乞食を見て外套を脱いで渡したこともあるし、ある西洋人の乞食にはセーターと、ポケットにある金をまるまるやってしまって、肌着だけを着て家へ帰り多くの人から怪しまれたこともあった。右手のすることを左手に知らせるなというイエスの御言葉にしたがって、こうしたことはいっさい誰にも話さなかった。(『我が告白』)

3，明治学院とキリスト教（2）

私は礼拝堂にも通ってみた。しかしその礼式と言葉はみな、私を満足させてくれなかった。私が聖経を読んで思い描いていたキリスト者は、どこにも見つけることができないようだった。キリスト者は外見からして普通の人とは違い、質朴で温柔で慎ましく、そしてなにか高潔な光を発していなければいけないように思われた。ところがどうして、ここの校長でも教会の牧師でもキリスト教界に名のある人物だといいながらみな、あんなに普通の人と変わりがないのかと思うと、一方で幻滅の悲哀を感じると同時に、一方で反感が生まれた。私が祈祷会の時間の終わりや教会から帰る道すがら、山崎（嶋田注：山崎俊夫。のちに耽美的な作風の作家として一部に熱狂的な愛読者をもつ）にそういう感想を話すと、山崎は私の肩を叩いて私の手を力強く握り、私と同感の意を表した。それで私はもう教会に行かないことにして、私ひとりキリスト者となって腐敗した現代のキリスト教を革新しようという途方もない野心を抱いた。(『我が告白』)

もしＨという聖書の教師がもう少し宗教的な人物であったら、私はもう少し感激したであろう。だがＨ先生は聖書を教えながら国家主義ばかり宣伝した。(『彼の自叙伝』)

十一月十五日（月曜）陰、寒。／礼拝時間は本当に嫌いだ。その祈祷会はすべて神様を恥ずかしめるだけだ。「大日本帝国を愛護して下さい。伊藤〔博文〕公のような人物を送って下さい。」滑稽！滑稽！それでも彼らはキリスト教信者だというのだ。舌は勝手に回るのだ。(「私の少年時代」：日記的な文章。1925 年に発表。安重根による伊藤博文暗殺は 1909 年 10 月 26 日）

偽善者！石灰を塗った墓の中で猜疑と憎しみにあふれながらも口では愛を説く者。内面では物欲にまみれながらも服を 2 着と持たない聖徒を装う者！私はある牧師を思い出すたびにこうして心の中でつぶやく癖がついた。(「나」)

＊金允植『李光洙とその時代』
当時としては仕方のないことで、明治三十二年、明治学院が徴兵猶予の特権を返還してまでキリスト教の理念による教育を守ろうとした経緯を考えれば、この学校は決して国粋的な学校ではなかった。
＊四方田犬彦の指摘によれば、当時の明治学院は 1 学年が 30 人ほどであったが、そのなかに大韓帝国留学生が 5，6 人いたという。(1998 年、明治学院大学言語文化研究所主催公開講座における発言)

山崎は実に聖徒のような端正な少年だった。(略）彼は私よりも一歳年上で顔立ちがよく、キリスト教の家庭で育って、心身と行いがきれいな人間だった。私は山崎と親友だった。我々は放課後になると、他の生徒の群れには交じらず、運動場の片隅に腰を下ろして聖書の話をした。私たちは戦争を否認し、殺すなかれ、というマタイ福音で学んだ言葉をそのまま信じ、トルストイとともに非戦論者だった。(『彼の自叙伝』)

私は毎日山崎君と会ったけれども、山崎君は相変わらず清潔なままであるのを見るたびに、本当に恥ずかしいと思った。けれども私は、山崎君が幼稚なのであって、私の方が先に進んでいるのだと自分をなだめた。たぶん山崎君は私の中に悪魔が潜んでいることを知らなかっただろう。(同上)

4，イ・ジュンオ『이광수를 위한 변명』

巫俗的な母方の家と儒教的な父方の家を基礎に幼い時期を過ごした春園〔李光洙の号〕は、父母に死に別れて独立し、天道教〔1905 年に東学から改称〕に身を浸す。クッ〔シャーマンが執り行う儀式の一つ〕を好み迷信を崇めていた母と母方の祖母、貧しくとも体面を守らなければという根深い儒教の家、祭祀の時ごとに経験しなければならなかった本家や分家の親戚たちの虚礼虚式、祖父に対する父の無条件の孝行は、感受性が強く聡明だった幼い春園が受け入れるにはあまりに大きな混沌だった。彼は父母に死別するやいなや、独立を宣言した後に位牌を焼き払い、妹たちを人に任せたまま承履達について天道教に入信する。

5，韓国統計庁によると、韓国の宗教人口は総人口の 53.1%を占め、非宗教人口は 46.9%である。総人口のうち、仏教が 22.8%、プロテスタントが 18.3%、カトリックが 10.9%、儒教 0.2%となっている。プロテスタントとカトリックを合わせたキリスト教全体では 29.2%となっていて仏教より信者の数が多い。なお、韓国で基督教といえばプロテスタントをさし、天主教と呼ばれるカトリックとは区別される。

6，柳東植は韓国のキリスト教の特徴として、以下の点をあげている（『韓国の宗教とキリスト教』）。
・天主教から出発していること
・外国人による布教ではなく、韓国人の自主的な摂取であること
・知識人階級から浸透していること
・文書と学問を通して摂取されていること

7，朝鮮半島のキリスト教との初めての接触は、1593 年の文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）において小西行長の求めに応じて朝鮮に渡ったイエズス会司祭グレゴリオ・デ・セスペデスであるとされる。李氏朝鮮では 1631 年、朝貢使節団によって中国経由でキリスト教に関する書物が伝えられた。最初の布教はマテオ・リッチが創設した北京のイエズス会が朝鮮の朝貢使節団員と接触して行われたとされ、やがて西学（キリスト教）の学者たちによるキリスト教徒の共同体が形成されていったという。これら信徒は司祭の布教によらずにキリスト教を信仰していた。

朝鮮史上初のキリスト教礼拝所は北京で洗礼を受け、帰国した李承薫（イ・スンフン）が 1784 年に平壌で設立したものである。この段階では宣教師は朝鮮に派遣されず、朝鮮におけるカトリックの受容は自発的に続けられた。しかし、当時の朝鮮社会では儒教が社会の根本思想となっており、カトリックは邪教として弾圧された。1866 年、フランス人司祭とカトリック信徒約 8,000 名が捕縛・処刑される丙寅教獄（フランスは朝鮮を攻撃したが撃退された＝丙寅洋擾）などが知られている（なお、この前年には東学を起こした崔済愚も処刑）。

8，19 世紀後半にはプロテスタント諸派が宣教師を派遣した。1885 年 4 月 5 日に訪朝したアンダーウッド（長老派）、アベンゼラー（メソジスト）などが知られている。彼等は訪朝の途次に日本に立ち寄り、李樹廷（イ・スジョン。農学習得のために来日、津田仙によって受洗、聖書のハングル訳に着手していた）と接触している。

9，徐正敏「李光洙とキリスト教」（前掲『李光洙とはだれか』）より

初期の韓国プロテスタント・キリスト教の社会的機能と意義を単純化すれば、大きく三つほどにまとめることができる。一つめは、韓国の多くの民衆が内憂外患の危機のなか、生命と最小限の財産を依託することができるという期待感の拡散だった。（略）二つめは、外国勢力侵入の危機、すなわち国権喪失の状況で、国を守ることのできる独立運動のエネルギー、組織力としての期待感である。特に他の国の場合と違って、非キリスト教帝国主義である日本帝国によって国権が剥奪される過程を目撃しながら、民族独立運動に献身した多数の民族志士、改革派らがキリスト教に入信し、キリスト教組織を利用して独立運動を企図したことがある。初期の韓国民族運動の人脈の総集結体であり、その産室と呼ばれた「尚洞派」、「皇城基督教青年会」（YMCA）などがその代表的事例である。三つめは、キリスト教全体がそのまま韓国の近代化、近代文明の窓口となったという事実である。ここでは大部分が宣教師らによって設立されたキリスト教系の学校の影響が大きく、新しい文物、知識、啓蒙の根幹となっていたのである。（略）朝鮮時代末期・旧韓国政府の政治的混乱と政府の役割喪失、最終的な植民地への移行過程において、韓国の初期近代化の重要な役割をキリスト教が果たしたことは間違いのない事実だった。甚だしくは、当時あらゆる新しいものはキリスト教会から来るという認識が広く澎湃した。

以上の三つの側面が初期韓国プロテスタント・キリスト教の社会的機能であったとするならば、それらは植民地下に置かれるとともに徐々に弱化、機能を喪失する過程を見せる。なかでも、近代文物の窓口、先端の思想とその媒介者としての役割は、急激にその座を明け渡すことになる。その背景には（略）1907 年の韓国教会大復興運動の影響、さらに、いわゆる「韓日強制併合」以後の官主導の近代化政策がもっとも大きな影響を及ぼしたということがある。のみならず、1910 年代に入り、キリスト教以外に新しい思想として流入する科学主義、合理主義、そして最後には社会主義も、キリスト教が担当していた文明、知識の先端を伝授する役割を押しやる原因として作用した。

10，大復興運動（revival）…宣教師の祈祷会を発端として、吉善宙（キル・ソンジュ）などの運動により拡大した進行復活運動。

＊元山という北部の東海岸の町で、宣教師や信者たちの間で「聖霊体験」が起こり（略）それは次に、一九〇七年に、ピョンヤンの牧師・信徒たちの間でも起こりました。（略）日本軍が李王朝軍の武装解除をした年で、着々と植民地化を推進していたころでした。（略）町は讃美と祈りにつつまれ、聖地のようになってゆきました。ピョンヤンが「東洋のエルサレム」と呼ばれるようになったのは、このような背景があったのです。（略）一八九〇年には一六九名しか数えることができなかったプロテスタント教徒は、わずか二〇年後の一九一〇年頃には一六万人（カトリック教徒は当時四万人弱）という爆発的な増加を見ました。（鈴木崇巨『韓国はなぜキリスト教国になったか』　2012 年　春秋社）

＊大復興運動は確かに韓国キリスト教会を外形的に、また内面的に大きく変えた。外形的変化としては、急激な量的膨張、教会自治の成立、リーダーシップの交替などをあげることができる。内面的変化としては、新しい信仰様態の形成、韓国的教会文化の定着などである。これと共に初期大復興運動は、韓国キリスト教の非政治化を定着させるきっかけになった。（李致萬「韓国キリスト教における初期大復興運動に関する一考察」）

＊大復興運動について、閔庚培（『韓国基督教会史』）は、「表面的には民族運動に対しては否定的であったが、内容的には信仰の内面化によって日本の植民地支配による民族的苦難を乗り越える精神的支柱」となったと評価する。一方で、朱在鏞（「韓国教会復興運動の史的批判」）は、「韓国教会に西洋キリスト教の保守的価値観、すなわち内面的・個人主義的信仰が何の批判もなくそのまま移植されたため、日本の植民地支配に対して抵抗できない終末論的信仰が生み出された」と批判的に評価する。（崔炳一『近代韓国における大復興運動の歴史的展開』新教出版、2009 年による）

11，李光洙は、1917 年に「耶蘇教が朝鮮にもたらした恩恵」という文章を発表する（『青春』所収）。そこでは「耶蘇教会は実に暗黒であった朝鮮に新文明の曙光を伝えた最初の恩人であり、また最大の恩人です」と述べたうえで、キリスト教が「朝鮮人に西洋事情を知らせたこと」、「道徳の振興」、「教育の普及」、「女子の地位の向上」、「ハングルの普及」、「個性の自覚または個人意識の自覚」などを社会にもたらしたと評価する。（徐正敏「李光洙とキリスト教」　前掲『李光洙とはだれか』　による）

12，「今日の朝鮮耶蘇教会の欠点」（1917.11）

そして、同年、同誌上において、李光洙はキリスト教の現況を強烈に批判する。
「第一に、今日の耶蘇教会は階級的です。…教役者となるのはかつての官吏となるのと同じ名誉と権勢だと考えています」。「第二は教会至上主義です」。「第三の欠点は教役者の無知なことです…しばし、長老教会の牧師養成の状況を見ましょう。普通学校卒業程度にもならない無知な者に毎年三カ月ずつ五ヶ年間、即ち十五ヶ月間新旧約聖経を一、二度読過させれば、牧師の資格を得て講壇に立ち万人の精神を指導する聖徒となります。そんな人間の無知なことは勿論です」。「第四の欠点は迷信的なことです…聖書を解釈するのに、可及的合理的、科学的にします。神学が科学と妥協することは、現代に極めて顕著な事実です」等と述べたうえで、「現時の朝鮮教会は専制的・階級的であり、耶蘇教の根本特徴である自由、平等の思想を没却してしまい、宗教の信仰を人生の全体と考え、信者、非信者の区別を善人、悪人の区別のように考え、人生の幸福は文明から来るものであり、文明は宗教以外に政治、法律、実業、科学、哲学、文学、芸術及び各種技芸から成立するものであり、宗教は実にこれら諸分科の一つに過ぎないということを知らず、学術、技芸を軽蔑し、諸般の文明事業を非神聖視し、文明進歩の熱望がなく、教役者が文明を理解せず、多数の教人を迷信へと引きずり込み、文明の発展を阻害し、迷信的進行に固執し、社会の趨勢と並進できないために、最後には文明的宗教の使命を果たせないと言えるのです」と要約している。（徐正敏「李光洙とキリスト教」　前掲『李光洙とはだれか』　による）